

2022年1月

しゃもじ一つ落としたばかりに大掃除 箱根路の熱冷めやらず寒の雨 もう義姉のおせち食せぬ喪中かな あらたまの光さし込む白障子 初詣苔の羅漢に会ひに行く コロナ禍や祈願の絵馬に震ふる 急な雪予報なくても道塞ぐ 今場所もけが人が多い大相撲 寒さ増し風吹き荒れて酒すすむ 正月や手妻も飽きてひと眠り 正月や江戸草子に耽りけり	一面に再三登場まん延防 寒空に大根いよよ旨み増し 大寒へ温もり運ぶ鍋料理 お年賀に自作の絵入りが喜ばれ 正月や孫三人の天下なり カルタ取り本気出しても孫に負け 減る賀状年のせいだと妻の声 ピロリ菌除去して五年玉子粥 110番どうもどうもとポリス来る 早起きと思えば時計壊れてた
--	---

2022年2月

白梅のそと膨らむ友の庭 朝ぼらけ障子に映る春の彩 茜雲幾何学模様の渡り鳥 喪に服しほんのわずかの札納め 寒なれど陽差し春めき布団干し 一茶にも想い女ありおらが春 ゆりかもめ一直線に手のひらに 残雪の光る秋葉や常夜灯 水重ね阿寺七滝冴え返る 昼時に人気少なし駅建物 手足冷え伝達出来ぬ脳指令	庭の隅ここでも咲くよと白水仙 寒肥で土作りして春を待つ 待ち人は見えずに風のさわぐ道 陽光の梅に冷たく風が抜け 「もあーさん」犬の寝言も人めいて 三日寝たワクチン効果ありそうな 世の中に心配尽きぬコロナかな 大人には解らないのか野球道 梅が咲き童の声も透き通り マスク生活目の表情で個性でる
--	--

2022年3月

嬉しさを持って孫来る春休み 椿花落ち庭に絵を描く春一番 一粒の種に望みを賭けて播く 無精者やっと気が付く竹の秋 湖に遥か赤石雪化粧 旅すれど帰ってみればロバの旅 欠かさない晩酌昼寝で絶好調 介護食あれこれ探す犬ごはん 絨毯に小石と思えば犬のフン 春彼岸先祖を偲ぶ暖かさ	雪多し避けて除いて人生きる 春一番枯枝とばし暖運ぶ 花の種腹含らませ春を待つ 友の温み抱かれ眠る夜寒かな 暁に朗報託し手を合わす 旅立ちは嬉し寂しの二重奏 何もなき山城跡や風光る 遠き日の野道の匂ひよもぎ餅 枝垂れみる梅のしろに空青く 三回目打ちて静かに日向ぼこ
---	--

核盾に大馬鹿者だプーチンは 五月には金も底つくロシアです	甘夏の取り忘れしちいさき実 枯芝の中に陽を浴ぶ草の花
---------------------------------	-------------------------------

2022年4月

鍵探す時間折り込み朝支度 夫婦旅合わぬ歩幅で妻迷子 アレクサを褒めれば返事「ありがとう」 親しきのまたひとり逝き花の園 ボール打つ心地よき音八重桜 雨晴れて芽吹きをちこち野の光る 枯れ株に命をつなぐ新芽伸び ソルダムの味忘れられず挿し木さし 筍が顔出し夫もやる気出し 桜咲き老人同士の心地良さ いいかおり朝が来たなど又ふとん また戦争焼けた庭先思い出す	春の日や遺影ほほえみ語り合う 筍を荒布と炊きし母の味 伽羅路や祖母から繋ぐ令和まで 新緑の芽吹きやんわり風つつむ 落花やゆらり湯船に遊ぶ月 振り返り去り行く犬や春の雨 プーチンめ八つ裂きにして虎の餌 神はどこ佛はいるのウクライナ 翔平の快音聞けて飯喰える 伝統の職人なくなるAI社会 戦犯は勝てば問われぬ代物ぞ 車飛ぶアトム維新の兆しあり
---	--

2022年5月

母の日は思いがけない菓子 若者の活気眩い老いの日々 梅雨を呼ぶ紫陽花の花出迎える せき止めし水の静けさ青もみじ 鳥の影探すその先雲雀笛 さみどりに滲む妻籠の時空間 新緑や走りの新茶求めけり 春野路や「あおねり」という菓子に会う 初咲きの芍薬銅の花器に挿す 卵の花やいぶりがっこもう歯がたたぬ たのもしややと二桁初夏の朝 格好いいルーペ通じぬ若い女	おしゃれして医者へ行こうと友は言う 久しぶり絵筆とらせる雨が降る 明けぬ夜はないと信じてニュース見る 花色を日毎に増して今宵散る 水入りの早苗植え込むその日待つ 犬だって分かるよ声の周波数 愛犬も雷こわくにじり寄る えごの木も花もたわわに頭たれ チリアヤメ一期一会と咲いてみせ マージャンのネットゲームは勝手にロン タダ旅行高い首輪を月賦買い 犬看取り夜中の吠えに安堵する
--	---

2022年6月

いでたちは月光仮面や合唱団 尾の生えた天使となりて天国へ 歴代の首輪並べて涙かな 花々に放水済むと雨の粒 各首脳思い任せず混沌す 若者の活気まばゆい老いの日々	夕空に浮き立つ合歓が人を呼び 雨脚に紫陽花の色深み増す 独裁者人の皮着る怪物か 走り梅雨つるっと滑って迂闊知る 憂える日さながら崩れ百合ひとつ 雨上がり紫陽花の毳光り合ふ
--	--

<p>雨上がり梅の実あまた落ちし朝 朝顔や雨戸あければ真先に この年もスモモ到来ありがたく またも雨草刈りの日と伸びる草 たおやかに衣まとひし文字ずり草 ハエ取りぐも今じゃ目で追う仲となり</p>	<p>木漏れ日に影を残して栗鼠走る 老鶯の鳴き声冴ゆる遺跡行く 梅雨晴れの濡れし石段犬滑り わが党はイエスとノーの二刀流 爺婆やもう引っ込んでと言う人も チェックせず大事故起こす太平の世</p>
--	---

2022年7月

<p>噴水か壊れた蛇口のように汗 「コロッケ」の顔芸に酔う歌に酔う よく見れば夫に似ている兵馬俑 紫陽花の咲きてにぎわう庭の隅 つがい鳥涸れし手水もお気に入り 朝露に打ち込む球やひとり黙 うちわ出す出番なくとも居場所ここ 梅雨寒と思ふばかりの今朝の涼 続く雨風鈴ひっそり窓辺かな 雨上がり晴れた街中暖房室 朝顔や明日はいくつと棚さがす 東空雲まで赤く屋根の波</p>	<p>雨催ひ明かりとなりて白木槿 街並の墨絵ぼかしや返り梅雨 木の間より鳥のさえずり疳高し 嫁曰く「つゆのジメジメ心地よい」と 葉も陰の茗荷目に止め蚊にやられ 我も又土用しのぎのうなぎパイ さあ大変どこまで続く赤字国 やっぱりねあの人の周り見えぬ影 わが庭に生まれし蝉よ声高し 金星をすると逃がして涼やかに 新仏しおからとんぼ夫の胸</p>
---	--

2022年8月

<p>市船ソウル最後は笑顔甲子園 ホームでも良し松菱跡の活用を あと少し鎌倉殿から家康に 夏の宵何故かすいとん食べたくて 出目金の絵柄に惚れてうちわ買ひ 甲子園ハンカチ王子思い出し お日様に立ち姿見せ百合の花 ひたひたとコロナ注射日近付きぬ 夏休み電話口にてひい孫と この極暑知らぬ存ぜぬめだかたち 虫けらも好む若葉の無農薬 銃声が花火音だったらとのことば</p>	<p>政治家をカモにされて大騒ぎ 朝顔や小さき姿桔梗かな 早朝の秋風の立つ窓の際 この猛暑秋の足音遠回り 人生よ長期平和は花の園 朝の空赤く静かに鳥進む ベビーカーあやすがごとく夕螢 息止めてつり橋渡る夏帽子 ベネチアに迷える夢や熱帯夜 竹やぶの風音清か夏の朝 夏の朝道をジグザク一巡り 孫帰り空気のぬけたプールだけ</p>
--	--

2022年9月

<p>孫曾孫期待大きい代がわり ああ涼しと思えどいまだ29度</p>	<p>法師鳴き山重なりて里の道 半月に見惚れし窓辺洗ひ髪</p>
--	--------------------------------------

<p>2価ワクチン来て4回目へと腰を上げ コロナ禍に中止となりしコンサート 名月や平湯の宿の露天風呂 ゴーヤ来ておかご飯行く友の家 久々に夫は木彫りの刃物研ぎ 姫小松葉末の雫玉と照り 愛着の和服手離し眠られず 飾り物蚊帳の外の五輪相 葉の裏に空蝉ひとつ夏去りぬ 髪薄くなるまで蝶を追ひ続け</p>	<p>下呂温泉上呂中呂も在りとか 目を合わせ散歩をねだる朝六時 稲光犬も布団にとびこんで 台風にも一緒にふて寝する 急な雨予告もしないで夢砕く 満月や扇子うちわの出番かな 赤トンボ人になって回す 赤とんぼコロナの不安置き去りに 芋の葉に真珠生まるる雨上がり まだ生きると決めし秋の服選ぶ</p>
---	--

2022年10月

<p>また夏日十月半ば去りにける 民衆に広げし行基佛の座 冴え渡る鼓の響くさむさかな 音太き森の水車や颱風禍 秋澄むや張り切る媪の野菜市 里まつり昔ながらの味噌おでん あの星に香り届けや金木製 月走る雲の流れの速きこと やんぞうこんぞう色づきポロリ掌に 稲雀ぱっと舞ひ上ぐ群をなし 無花果の枝切り払ひ空高し 帰りきて夫の不在やカギ忘れ</p>	<p>白い髪秋の深きに数増やす 大相撲怪我人多く哀れ呼ぶ 白雲や居場所あるぞと広がれり きみまるがネタを忘れてあやまるで 円高でほくそ笑んでる人もいる スターでも目こぼしできない徴兵制 三割は寄付とは言わぬぼったくり プーチンめこの世の主と勘違い 愛犬は文句も言わずただ直く 藤袴蕾膨らみ蝶を待つ 見晴るかす苧田に陽射し伸びている 医療事故他人事でない大当たり</p>
--	---

2022年11月

<p>裏山の紅葉色付き師走入り 声かけて育てし野菜皆が褒め 柿すだれ晩秋の陽をみな集め 手櫛入れ眺め吐息の木の葉髪 天空より湖面に続く月の橋 さつまいも二つ転がし炊くごはん 竹の春朝日に透けて青々と 露の朝ボール打つ音静かなる 秋の湖の風さそいくる我一步 句読点ほどにゆかしき水引草 文化の日天長節であり頃 母の忌や庭に静やか石路の花</p>	<p>華やいで街を潤す大道芸 青い空山一面がみかん色 どの国も女性指導者努力大 熟柿一口ごとに悦に入り 藤袴咲けど来る人待ちにけり 医者曰く加齢とさっと流しけり プーチンのまことしなやか病気説 扇風機冬場は空気循環機 コロンボのかみさん出てよいるならば 潮の香や灯台までの花野道 産土の庭の華やぎ秋ざくら 風吹きて人恋しきや秋の暮</p>
--	--

2022年12月

糖尿は痩せるが薬と諭す医者
数値見て一念発起のダイエット
大掃除肋骨にひびの置き土産
紅葉に古代神話の謎秘める
朝雀静寂の空に一喜飛ぶ
シクラメン庭の風景西洋化
行秋や芭蕉に会へり川湊
紅葉のグラデーションやミイラ仏
眼裏に柿の残影美濃の旅
寒椿一輪咲きて庭の主
朝陽射す手水に椿映りけり
はぜの実に心かたむけ笑む媼

ただ一葉見舞いのことば小夜しぐれ
病お妻にそっと一さじ葛湯かな
己が冬芋の香りで幕が開き
色付くを数へてみたり朝なさな
玄関に黄蝶舞ひくる誕生日
寒波来て満天星の赤極めたり
澄みきりし空のかなたに戦禍なお
電柱に蔦まきつきて絵となりぬ
ねこじゃらし湖畔の風にじゃれている
人知らぬ底なし沼の恍惚か
自分だけ助かりたいと供養する
阿呆陀羅今度は何処の根を掴む